

リハビリテーション病院

認定病院の改善事例紹介シリーズ

Improve Vol.28

[紹介事例]

岡山県 岡山市

公益財団法人操風会 岡山リハビリテーション病院

職員のやりがいとリハビリの質の向上を目指して



人の安心、医療の安全 JQ

公益財団法人 日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care

<https://www.jq-hyouka.jcqhc.or.jp/>

今年度のImproveでは、病院の質改善活動のツールとして、はじめて病院機能評価を活用した医療機関を紹介します。今号は、機能種別「リハビリテーション病院」で新規受審した岡山県岡山市の公益財団法人操風会 岡山リハビリテーション病院を紹介します。



経営理念

1. 安心して、生命をゆだねられる病院
2. 快適な、人間味のある温かい医療と療養環境を備えた病院
3. 他の医療機関・福祉施設と共に良い医療を支える病院
4. 職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある病院

患者・家族・地域社会・そして職員のために

岡山リハビリテーション病院は、1953年6月に設立された東山病院を前身として、順次リハビリテーション機能を強化し、2011年11月に現所在地の岡山市倉田に新築移転した際に全病棟を回復期リハビリテーション病棟としたリハビリテーション専門病院である。全職員254名のうち療法士が114名を占め、最新のリハビリ機器も多数導入するなど、地域のリハビリテーションを牽引している。公益法人として、同一法人内の岡山

旭東病院（急性期病院）と岡山ハッピーライフ操風（サ高住）と共に、「全人的医療・介護を提供する活動等を通して、地域医療体制の向上を図ること」を目的に日々活動している。病院としては、病院理念のひとつの「職員ひとりひとりが幸せで、やりがいのある病院」を一番大切にしているという院長の言葉通り、患者さまだけでなく職員にとってもよい病院となるように今後も取り組んでいくことだ。



積極的に地域への情報発信を行っています

HP



Facebook



Instagram



岡山リハビリテーション病院の各種QRコード



病院機能評価は 職員のやりがい向上の絶好の機会

病院機能評価に取り組むことは病院の一体感を生み出し、リハビリのレベルアップにもつながります。患者さまだけでなく職員にとってもよい病院となることができる絶好の機会と考えています

(病院長 十河 みどり)

自分たちの取り組みが適切であるかという不安

2000年から2015年まで認定を取得していましたが、病院の新築移転および電子カルテの導入等があり、一度更新を辞退しました。受審していないかった期間も自分たちとしてはやるべきことをやってきたつもりでしたが、医療水準は年々向上しているため、自分たちがそれについていけるか不安に感じていました。また、認定病院患者安全推進協議会に参加できなくなり、患者安全をテーマとした研修会等に参加できなくなったりもあり、改めて受審することを決定しました。

目指したのは病院一丸となって取り組むこと

私は過去に病院機能評価を受審した時は副院長でしたが、プロジェクトチームなどの一部の人たちだけで対応していて、職員全体に周知することができませんでした。そのことを反省点として、今回の受審では職員が一丸となって取り組むことを目指しました。例えば、リハビリテーション部の職員は受審を経験したことのない若い職員が多いため、役職者が説明をし、指示しながら受審準備への参加者を増やしていくなど、職員ひとりひとりが主体的に病院機能評価に参加する意識を持ってもらえるような意識改革を行いました。

受審をして得たのはより一層の職員の一体感

受審をすることで、より一層職員の一体感が生まれたと感じています。例えば、審査手法のひとつのケアプロセス調査では多職種の関与を確認されるので、多職種で話し合いながら改善に向けて取り組むことができました。さらに、これまで以上にチームワークもよくなり、「次はこれについてみんなで話し合おう」というように自発的に様々なカンファレンスが増えてきています。また、実際の審査でも清潔・不潔のチェック、患者さまの目線での表示の仕方等をご指導いただきましたので、患者さまにとっても今まで以上に信頼(安心)でき、快適に療養生活が送れる病院になったと感じています。

受審検討中の病院へのメッセージ

リハビリというのは、自宅や施設に戻られたり復職されたりするまでの短い期間にはなりますが、急性期の病院から来られた患者さまをしっかりよくして次へつなげるという大事な役割があります。そして「リハビリを通じて患者さまがよくなって在宅復帰・社会復帰していくことに自分たちも関与できた」という職員にとって素晴らしいやりがいがあります。病院機能評価は受審して評価や指摘を受けることでさらにリハビリ病院として組織の活性化やリハビリ医療の質のレベルアップを図ることのできる仕組みですので、ぜひ受審していただければと思います。

病院概要

病院名	公益財団法人操風会 岡山リハビリテーション病院
代表理事	土井 基之
病院長	十河 みどり
所在地	岡山県岡山市中区倉田503-1
開設	1953年
標榜科目	リハビリテーション科、内科、循環器内科
病床数	129床
病院HP	https://www.okayama-reha-hp.or.jp/

2023年12月時点

病院機能評価受審へのROADMAP



リハビリ部

受審をすることが決まった時の思い

最初は「意味はあるのか」

「適切に評価してもらえるのか」と思っていた

(受審経験者) 以前病院機能評価を受審した時はできていないところを探され、ちょっとした失敗も指摘されるという感覚があった。正直なところ受審をする意味はあるのかと思ったが、自分たちの中で受審をすることの意味を探すことになった。

(初めて経験する職員) 前回の受審時も職員だったが、実際に準備などに携わったわけではなく大変そうだなと思っていた。自分が担当者となり、病院機能評価がどういったもので、何をしていかなければいけないのか、自分たちが普段行っていることを適切に評価してくれるのかという戸惑いはあった。

情報収集

岡山県病院協会が開催している病院機能評価受審予備講習会に、院内の主要メンバーや診療部、看護部、事務部の各代表者が参加した。また、同一法人内の認定病院から評価項目ごとの担当者の割り振りや受審に向けたミーティングの議事録等の資料をもらい活用した。その他、評価機構が提供しているケアプロセス調査の実演動画(現在は改善支援セミナー【審査当日編】に収録)なども参考になった。

目標・情報の共有

病院機能評価を職員ひとりひとりの目標に

経営理念に基づいた経営指針書の策定を毎年行っており、経営指針書には、事業計画と事業計画を達成するための部署計画・委員会計画などが掲載されている。「職能資格人事制度」では事業計画・部署・チームの計画などを踏まえて職員個々の個人計画が設定されている。事業計画のひとつに病院機能評価の受審が掲げられていたため、多くの職員がそれを個人計画に盛り込み、院内全体の目標共有が図られた。

また、全職員が閲覧できるファイルサーバー内の共有フォルダを作成し、受審に関するすべての資料・様式・作成文書などを公開して情報共有を行った。

2022年経営方針

優先順位UP!
病院機能評価受審へ
向けての準備

2021年経営方針
病院機能評価受審へ
向けての準備

病院全体

2020年～

看護部

リハビリ部での担当者の選出について

リハビリ部での担当者は、リハビリ副部長とPT・OT・STの各部署の役職者4名をリハビリ部長が選出した。そのうちの1人はセラピストマネージャーの資格を持っており、回復期病院関連のネットワークなどから情報を入手できることも期待した。また、各担当者は5年後10年後もリハビリ部の中心で活躍していく人たちのため、選出の背景には次世代の育成という観点もあった。

リハビリ部として意識したこと

大事なことは職員全員で取り組むこと

以前の受審の時にはコアメンバーだけで準備をしていたため、それ以外の職員はほぼ関与していなかった。病院全体として取り組もうとしているのに一部の職員だけで進めていくというのは適切でないと考え、まずは「病院機能評価とは」や受審の目的・意味をリハビリ部全体に説明・周知した。

病院機能評価だからやるのではない

また、実際の取り組みにあたっては、せっかくの受審をマイナスなイメージではなく、よい機会と捉えてもらうために「病院機能評価があるからこれをやってください」ではなく、「これがこういう理由で必要だからやっていこう」「新しく何か特別なことをやらなくていいから今やっていることを形にしよう」というように進めていった。

プロジェクトチーム(担当者)の選出方法

診療部：院長と副院長の2名がプロジェクトチームのメンバーとなった。

看護部：師長主任会（師長・主任・副主任）、介護の主任会、看護部内の委員会の委員長をプロジェクトチームのメンバーとした。また、必要に応じて看護部以外からも病院全体で関連する委員会の委員長などの責任者もプロジェクトチームに招集した。

事務部：業務管理課、医事課、診療情報管理室、施設管理課の所属長をプロジェクトチームのメンバーとした。

2022年4月キックオフミーティング

課題を洗い出し、一覧表で見える化

解説集を読み込んで必要事項を洗い出し、何が足りなくて何が課題かという一覧表を作成した。課題ごとに関係する委員会の委員長などに振り分けて担当者とし、当該委員会で議題にあげ、スタッフ全員で考えて改善に取り組んだ。また、解説集で求められているマニュアルがないものについては新しく作成した。

項目	キーワード・重要と考えられる事項・確認事項	必要と考えられるマニュアルなど	確認・依頼事項
2.1.4 情報伝達エラー防止 対策を実践している	・Dr.指示受けの方法の確立／・変更・中止等時間なども記載／・必要事項が速やかに関係者に伝わる仕組み→検査・薬局・給食・リハ／・指示受け・実施の記録→日時も／・検査・緊急性のあるもの→確実に医師へ伝わる仕組み／・勤務交替の申し送り・外来から病棟／・入院中に実施した検査結果の外来への連絡	・医師指示受けマニュアル／・口頭指示受けのルール／・薬剤名、薬剤料、投与方法が院内統一、記録(事後の処理方法)	・医師指示だし・指示受け・口頭指示(記録方法も)マニュアル・医師不在時の対応(Aさん)／・検査の流れ、伝達(Bさん)／・薬事管理(薬局)／・申し送り基準(勤務交替・病棟→外来)(Aさん)
2.2.8 患者が円滑に入院できる	・入院案内／・説明経済的な支援／・家族の希望による病院見学／・日用品の準備／・食事時間などを過ぎた場合の対応／・遠方からの受け入れ手順／・急性期病院との連携業務に看護師を配置、入院に寄与している(退院支援看護師)	・入院のしおり(内容確認)／・入院の流れ(MSW 入院相談のマニュアル)／・病棟入院オリエンテーションマニュアル／・ゴミの分別、洗面所・浴室の使い方など表示や説明／・入院受け入れのルール	・入院案内の確認(クラーク)／・入院時オリエンテーション(Aさん)／・病棟管理(Cさん)／・院外からの受け入れルール(Dさん)／・急性期病院との連携(退院支援看護師)／・緊急入院、緊急退院マニュアル(Aさん)／・外国人・視聴覚障害者への対応(確認)

※項目は「リハビリテーション病院」の評価項目です ※岡山リハビリテーション病院が実際に作成したものから一部抜粋

自己評価の方法

自己評価はアピールする場

リハビリ部での自己評価は、まず中項目を担当者に振り分けることから始めた。評価機構に提出する自己評価調査票は病院のアピールにもなるため、わからないことは現場のスタッフに聞いて、アピールできることを増やし担当者に自己評価の作成を依頼した。一度作成した自己評価を担当者間でチェックし合い、こういった内容を盛り込めばよりアピールになるのではというのを繰り返しながら内容を洗練させていき自己評価調査票を完成させた。

解説集の活用方法

解説集は課題を見つけ出すツール

受審準備にあたっては解説集を読み込み、自分が普段行っている内容と照らし合わせて、できていること、できていない・不足していることを確認した。できていないことは課題として整理し改善に取り組んだ。例えば、普段行っているが記録として残していないことがあったため、「研修会の内容と参加者をファイリングしてもらいたい」「他職種とちょっとしたコミュニケーションをとった時も電子カルテに入力してもらいたい」といったことを現場のスタッフに伝えていった。なお、「病院機能評価だから取り組む」ようなことはしたくなかったため、解説集を現場のスタッフに配るということはしなかった。

重要課題だった倫理への取り組み

受審準備を始めた時、倫理の項目に非常に不安を感じていた。それまでは倫理に関する取り組みがなく倫理に関する知識が不足していたためと、倫理カンファレンスを行っていないかったためだ。そこで、看護部の師長主任会を中心に勉強会を開催し、その勉強会に参加した師長などが主催して、看護師だけではなく多職種を巻き込んで模擬的にカンファレンスを行う勉強会を開催した。倫理カンファレンスは日常的に行っていく必要があるため、看護部が中心となって電子カルテの中にカンファレンス用紙を作成し、また、倫理カンファレンスの開催事例を共有フォルダに入れて院内で共有した。今では日常的にちょっとしたことに対しても倫理カンファレンスが行えており非常によかったです。

病棟選択

当院は回りハ病棟を3病棟有しているが、病院指定の病棟は、プロジェクトチーム内の診療部のメンバーである十河院長の担当病棟とした。残りの2つの病棟はケアプロセス調査の症例を3症例ずつ準備して、どちらの病棟が選択されてもよいような体制を整えた。

サーベイナー派遣

2022年12月には評価機構が用意している受審サポートメニューの「サーベイナー派遣」を利用した。実際のサーベイナーに面接調査やケアプロセス調査などを模擬的に実施してもらうことで、現状と審査当日の動きを確認することができた。



受審準備中に苦労した点

- 自己評価調査票に文字数制限があり、アピールしたい点をどのように収めるか苦心した。
- 他部署と共同して改善に取り組む場合は、自部署内だけでの改善と比較して時間がかかり、進め方が難しかった。課題と対応状況の確認をなるべく細かく行うように意識した。
- 解説集に書いてある内容が何を指しているのかという置き換えが難しかった。同一法人内の認定病院や他の認定病院から情報を入手し、加えて、担当者間で相談し合うことで解決していった。

受審を通じて見えてきたこと

- 受審をするまでは、自分たちが普段行っていることに自信を持っていて第三者の視点にそれほど価値を見出していくなかったが、受審を通して自覚していくなかった課題も見つかった。
- これまで自分たちのよさをアピールすること得意としてこなかった。監査(調査・検査)を受ける、質問されて答えるというように受け身なことが多く、自分から前に出て答える機会は少なかった。今回の受審からは、自分たちが大切だと思って行っていることをアピールするという視点が大事だと学んだ。患者さまやそのご家族にとって大事だなど職員が感じていることを表現する仕組みがないことに対して、そのような仕組みを作っていくのを今後も地道に行っていこうと思う。

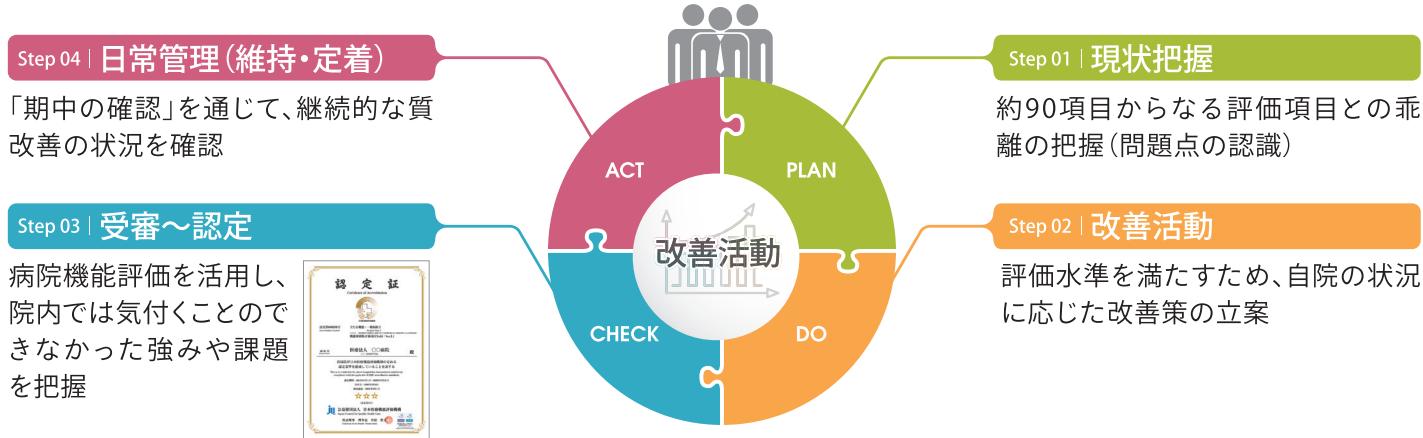
病院機能評価とは…

病院の質改善活動を支援するツールです。

患者さんの命と向き合う病院には、その医療の質を担保するために備えているべき機能があります。

国民の健康と福祉の向上に貢献することを目的とする公益財団法人として、1995年に設立された日本医療機能評価機構は、病院が備えているべき機能について、中立・公平な評価調査者チームによる「病院機能評価」審査を行い、一定の水準を満たした病院を「認定病院」としています。

評価を行う項目は「患者さんの視点に立って良質な医療を提供するために必要な組織体制」や、「実際に医療を提供するプロセス」、「病院全体の管理・運営体制」など、約90項目があります。信頼できる医療を確保することを目的に、評価調査者が病院の機能を評価することで、その病院の課題を明らかにして医療の質改善を支援するものです。



バックナンバーのご案内



バックナンバーは評価機構のホームページよりご覧いただけます。
<https://www.jq-hyouka.jcqhc.or.jp/tool/improve/>

スマートフォン・タブレットはこちらから



- Vol.27 特定医療法人財団松圓会 医療法人慈公会 公平病院 (2023年2月発行)
- 特別号 高度・専門機能(救急医療・災害時の医療) (2022年4月発行)
- Vol.26 特定医療法人財団松圓会 東葛クリニック病院 (2022年2月発行)
- Vol.25 公益社団法人鹿児島共済会 南風病院 (2022年1月発行)

その他の活動

評価機構では質改善活動の支援として様々な活動を行っています。



スマートフォン・タブレットはこちらから



詳細はホームページをご覧ください ➡ <https://www.jq-hyouka.jcqhc.or.jp/>

Improve Vol.28 認定病院の改善事例紹介シリーズ

リハビリテーション病院(主たる機能)

2023年12月発行

発行:公益財団法人 日本医療機能評価機構

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1丁目4番17号 東洋ビル

TEL:03-5217-2326(評価事業推進部) <https://www.jq-hyouka.jcqhc.or.jp/>

E-mail:jushin@j cqhc.or.jp

